波多野完治氏への「聞き書き」（全文／400字×77枚　）
日時：1990年1月31日（水）10:00～14:30
場所：波多野完治氏宅（東京・文京区）／聞き手：佐々木宏子

この「聞き書き」は、1990年1月31日に波多野完治氏のご自宅（東京）で行われたものである。それから約30年の歳月が流れている。先生は、当時86歳のお誕生日を間近にされていた。波多野先生は2001年にすでに逝去されているが、私はこの「聞き書き」の一部を、「波多野完治と『児童読物ニ関スル指示要綱』（内務省警補局図書課／昭和13年10月）－引き継ぐべき課題とは何か」（絵本学 No.18、2016.3.30、pp.1-12.）として公表している。当時、先生は私の質問には快くお答えくださったが、「まだ、話せないことはある」と述べられていた。

この「聞き書き」の文章は、録音テープを起こした文章を一度先生にお目通し頂き、修正をした文章は1990年6月25日に完成した。そこには修正のために赤の色鉛筆で書き込んだ先生独自の筆遣いの跡が残っていて、とても懐かしい。

今回、この「聞き書き」を公表したいと思ったのは、日本学術会議の会員候補6名を菅義偉首相（当時）が任命を拒否したが、2020年10月の発覚から1年以上経過した現在も、何の進展もないまま放置されていることがきっかけである。

私が、波多野完治氏から一番お聞きしたかったことは、太平洋戦争中とその前夜に、多くの研究者（波多野氏も含めて）が思想統制を受け拘束されたり発禁処分を受けたりしたことを、彼がその後の人生でどのように考えたか、そこから得た教訓を現在の研究者へと伝えたいことは何かについて知りたかったからであった。

しかし、お読みいただきお分かりの通り「あそこでねああいう権力機構があったらね、やっぱり使うべきだっんだ」「僕なんかはね、50年間自己批判し続けてきた理由ですね、ええ。まあ、死ぬ間際になって、突然その啖呵きって、そいで、死んでったということになるかもしれない」という、私の意図とはまったく逆の発言を引き出してしまった。

私は、その発言に茫然としその理由について考え続けてきた。そして、再び、日本学術会議の任命拒否の問題が発生してしまった。私は、この問題は明らかに現代の「思想統制」であると認識している。

私は、波多野氏の戦後の様々な業績については、今なお評価している。しかし、もし、彼が「５０年間の自己批判」について深く語っていてくれていたならば、そのことは彼の最大の「業績」として後続する研究者たちに遺されたのではないかと残念でならない。

このことは、ひとえにインタビュアーである私の力量不足であると認めざるを得ない。今なら、もう少しマシな問いかけ方ができると思うが、この「聞き書き」を公表することでどのように問いかけたならば良かったのか、多くの方々と問題点を共有したいと考えている。

佐々木：お忙しい時間を、私のためにさいていただきまして本当に有難うございます。「わが国における絵本の児童心理学的研究の成立過程」（Ⅰ～Ⅲ）を「鳴門教育大学研究紀要」（教育科学編）に書いてまいりまして、色々な疑問点、おたずねしたいことが出てまいりました。それで12月1日（1989年）に発達心理学会の設立総会（東京）でお目にかかりました折、ぜひ波多野先生に昭和初期の頃のお話を伺わせてほしいとお願いしたわけです。

12月にお会いしました時、先生がすでに雑誌「教育」（1989、4月号）において滑川道夫、富田博之両氏とともに「戦時下の児童文化Ⅰ」というタイトルで、かなり私のお聞きしたいと思っていたことを話し合われていることも知りました。そこで本日は、心理学研究者のサイドから質問をさせていただければと考えております。

波多野：そうねぇ。滑川君だと教育者のサイドっていいますか、絵本研究者のサイドっていいますかね、そういうものが前面にきてますね。

佐々木：そうですね。「教育」の中でも、先生がおっしゃっていますけれども、もともとこういう風な昭和１３年の「指示要綱」が出る以前から、先生自身は児童文化の状況をなんとかしなくてはいけないっていうことを、ずっとお考えになっておりまして、そして雑誌「生活学校」の座談会なんかでも、本当に今、現代でもそのまま指摘される問題点を、すでにおっしゃっているわけなんですよね。で、その中で私が非常に印象に残りましたのが、「日本の児童文化のなかでファンタジーの欠乏と

いうことが、非常に大きな弱点としてある」ということをおっしゃってるんですね。で、それに対して、現場の小学校の先生がやはり出席なさってるんですが、「一体そんなものが子どもにあるんだろうか」ということをおっしゃってるんです。

波多野：へえ、そんなことを？

佐々木：これは心理学者が勝手に幻想してることじゃないか、なんていう風な言い方を　小学校の先生がなさってるんですね。で、なんかこの問題っていうのは、そのまま現代でもあり得るような気がしましてね。

波多野：ほんとねぇ。

佐々木：特に心理学者がファンタジーとか、児童文化とか、そういう風な問題について、歴史的にみましてあまりとりあげていないんですけど、それは何故なんだろうかっていうことが非常に私には疑問に思うんですね。で、児童心理学の領域のなかで、どうしてこういう分野の問題が心理学者によってきちっと考えてこられなかったんだろうかということが、ひとつ大きな問題なんですけれども、先生のお考えをお聞かせ願えればと思います。

あのねぇ、子どもを取りまく環境としての、ファンタジーの欠乏ということですね

波多野：あのねぇ、子どもを取りまく環境としての、ファンタジーの欠乏ということですね。この問題はね、戦前からの問題でね、決して今始まったことではないんですね。で、50年も70年も前から、そういう事実はあって、そいで、それに対して、抵抗してきた歴史っていいますかね、それから新しいファンタジーを創造していった歴史っていうのが、日本の歴史の姿じゃなかったかと思いますね。そいでね、戦争前の、このあんたの論文にはどこらへんに出てくるのかわかんなかったんだけども、「キンダーブック」がまあ、大体、倉橋惣三さんによってつくられたときにはね、やっぱり倉橋さんはその問題を考えていたと思いますがね。ですから、心理学者で幼児の問題を考えるような人は、倉橋先生にしても、それから城戸幡太郎先生にしてもね、その立派なものをつくろうということは考えていらしたと思うんですね。

そいでね、ただね、こういうことはあったと思うんですね。ま、倉橋さんが一番典型的だと思うんですけどね、倉橋さんの場合にはね、本当のファンタジーっていうものはね、本当の生活をつかむということの中からしか生まれないと。だから本当のファンタジーを生み出してやろうとすれば、まず生活というものをつかませることをちゃんとしなきゃいけない。で、それはリアリズムという言い方でいったらいいと思うんですが、絵の場合には、リアリズム的な絵ですね。それから、手の指が５本あるんだから５本描いてなきゃいけないとかね、そういうようなところはね、かなり注意してね、やると。それから機関車にしてもね、本当の機関車をちゃんと描くというようなね。それは、「キンダーブック」なんかは他の絵本が全然そういうところがメチャクチャだった頃にね、ちゃんとそうでなくやってできた。

で、それとは別にね、心理学者のやった世界とは別の世界で「コドモノクニ」っていう雑誌がありましてね、これはね、心理学者なんかのいうことは無視して、本当の芸術的な絵本をこしらえようという目標でやりだしたんですね。で、「コドモノクニ」の仲間としては、与田準一とかね、ああいう人なんかも入っていたと思いますけれども、で、その人たちは「キンダーブック」のようにリアリズムを徹底するいき方でファンタジーを養おうっていうのはできないんじゃないか、むしろファンタジーを失わせるんじゃないかという考え方にたってたもんですから。まあ絵の方でいえば、19世紀的なリアリズムとかせいぜい印象派までの絵の描き方よりももっと新しい絵本の画家の人を動員して「コドモノクニ」っていうのは、やってたと思います。ですから、「コドモノクニ」、最近出版されたかどうか分かりませんけども、復刻されてない…。

佐々木：「コドモノクニ」だったら、復刻されていません。「キンダーブック」は一部復刻されました。

波多野：ああ、そうですか。

佐々木：非常に残念なんですけどもね。

波多野：ああ、そう。ああ、そう。私ども　は不思議にね、「コドモノクニ」の方に動員されちゃったの。

佐々木：ああ、そうですか。

波多野：そいでね、「キンダーブック」の方へはね、殆ど動員されませんでした。それがね、面白いんですがね、あれは倉橋さんがやってた雑誌なんですよね。そいでね、売れた時にはね、17万部ぐらい。これはね、戦前だったと思いますけどね。ですからね、非常に売れてたんですけどもね、はじめのうちは、「キンダーブック」は、あんまり僕達のところへはこなかった。でね、倉橋さんという人はね、あれは、心理学者ですよ。東大の３８年じゃなかったかしら、卒業ね。そいですから、心理学科が設立した時にあの人は大学を卒業して、そいで、助教授、初め女高師の講師か何かになって、間もなく附属の園長という形になるわけですね。そういうようなことですから、心理学者がそういう絵本革新の先頭にたっていなかったといえば、ちょっと言い過ぎだと思います。そいで、そういうことがわからない人ばっかしだったという訳ではないんですね。

ただね、世の中が一般的に非常に自然科学万能の時代で、しかもその自然科学っていうのは大体、機械論。機械をもとに

したような、そういうもんですからね、ですから、ファンタジーみたいなものに訴える役割が非常に、ま、殆どないといったほうがいいですね。そして特に、その頃の教育学者というのがね、ま、大体御用教育学者ですわ。その、明治から大正期にかけてはね。そいですからね、文部省の言うことを言ってるようなところがあったんですね、教育学者ってのは。その頃はね。そういうようなね、非常に硬直した教育理論をとってましたから、絵本の価値とかね、いうものはね、殆ど認められないものだったんです。そうだったでしょ？

佐々木：はい。そういたしますと、そういう風な…。

波多野：ま、そんなようなことで、先駆的な試みがいくつかあったことはあったんだけれども、それが成功しなかった、という風に考えたほうがいいんじゃないでしょうかねぇ。で、今日のね、絵本の隆盛っていうのはね、これはまあもちろん直接にはね、アメリカの占領をきっかけにして、軍ですね。それで、あんたが書いたように福音館とそれから岩波さんとがね、やったんだという風にね、みてもいいですけども、その基礎は私どもがこしらえたという気はしてますね、私は。

佐々木：そうですね、はい。大正期の「コドモノクニ」にしても、それから「キンダーブック」は観察絵本という形で始まったんですけれどもね、あの頃の流れが何かこう、きれいにつながっていないという印象があるんですね、私自身に。で、あたかも過去の歴史というものを、何かこう全部カットする中で、欧米からの輸入ということになり、その辺のつながりがどうしてもう少しきれいにいかなかったのかなあという印象が、私にはすごく　強いんですけれどもね。

波多野：それはあります。それはね、やっぱり講談社の絵本の影響じゃないでしょうか。

佐々木：影響でしょうかねぇ。そういたしますと、ま、大正期・昭和初期にかなり心理学者が関わった絵本の改革のようなものがございまして、むしろそのファンタジーということは、教育学者よりも心理学者の方が、よりそのものについての考えというものを持っていたということだと思うんですけれども。それが丁度その昭和１３、４年辺りから１６、７年ぐらいまでの間の児童文化のすごい隆盛をみる時期がございますね。「教育」のところでも先生がお話しになっておりましたけれども、また、「新児童文化」（昭和１６年）の中でも引用されているんですが、以前先生が「教室」という雑誌に今の児童文化運動の指導的な立場にたっているのは、心理学であるということをおっしゃっているんですね。

波多野：ああ、そう。ハハハ（笑）

佐々木：はいはい。で、そうすると、そういう教育学者よりもむしろ心理学者の方が、新しい問題意識のもとに何かをやろうとしていたというのが、丁度その頃のなんていいますか、佐伯郁郎さんなんかがなさろうとしていたある種、国の意図を持っていたものとがきれいにそこでドッキングしてしまったといいますか、重なってしまったような気がするんですね。

波多野：そうですね、ええ。で、後のね、展開っていうものを一応考えないで、児童文化の運動だけをね、考えてみますとね、私は、その頃までに起っていた、つまり新しい児童観にもとづくね、子どもを社会的に見なきゃいけないというね、そういうこと、そういうところから子どもの想像性というものを発見していこうという、そういういき方が丁度うまくね、あそこで出たんだと。

佐々木：そうでしょうね。

波多野：そいでねその場合にね、その後のことを考えないでですよ、昭和13年、14年、15年頃までね、3年間ぐらいの時期を考えてみますとね、僕は日本における児童文化の第一の興隆期っていうのは、あそこにあったという風に思いますね。

佐々木：そうですね。で、その頃に問題提起されてますことは、波多野先生にしても、それから城戸幡太郎先生にしてもそうですが、本当に現代にもそのまま要求されている問題意識なんですけれどもね。で、あれだけの波を越えてきていながら、何故戦後の心理学者がそれをうまく引き継げなかったんだろうか、っていう思いがするんですね。

波多野：心理学者が引き継げない…。

佐々木：例えば、乾孝先生なんかは、割に幼児文化とか児童文化の問題について、研究なさっておりますね。

波多野：そうそう。

佐々木：しかし、心理学の流れとしては、

（ここで中央大学の寺内礼次郎氏がお見えになる。）（氏は当時『波多野完治全集』全12巻／小学館を、中心となって編集中であった。･･･筆者註）

波多野：あの、ちょっとね、途中でご紹介しますけども、中央大学の寺内礼次郎さん。そいでね、実はね、僕はもうこのへんのこと、頭の記憶がうすれちゃってるんですよね。で、寺内君はね、丁度この頃の児童文化運動のことをね、関心持ってて、国会図書館行ってね、私の著書なんかも全部ゼロックスしてとってきたわけね。なんかそういうこともしてますし、それから私の初期の研究は非常によく知ってらっしゃるもんですから。私だと85歳にもなるので、記憶がうすれているようなことね、

寺内君ならはっきりとするっていうこともできるもんですから、そいで来ていただいたわけなんです。ですから、話はそのまま進行していただいて結構です。

佐々木：ありがとうございます。それで、ちょっと話もとに戻しますけれども。

波多野：今の話はね、戦後の心理学者の活動が不足しているという意味ですか。

佐々木：ええ。そういう、例えば児童文学とか幼児文化、あるいは児童文化についてですね丁度先生方がなされていたときの流れが、あまりきれいに引き継がれていなくて、なんていいますか、非常に実験的な手法のものが、科学という形で心理学に要求されてきましたので、そうしますと、子どもの文化と児童心理に関わりますものはかなり高度な意識というものを扱い、いわゆる実験とか非常に短い期間での観察をして処理をして、ある程度の結論を出すという方法論とは、なじまないのではないか。そういうものとの影響で理論的に深まるということがなかったっていうことなんですが。

波多野：そうですねぇ。そうですか。そいで？

佐々木：ええ、ちょっと話をもとに戻すんですが、「指示要綱」のあと「児童絵本をよくする座談会」が９回ばかり行なわれました。で、これは復刻されたものなんですけれども、私は復刻以前、やはり国会図書館からコピーをとりよせまして、かなり読んだんですが、４回目で児童心理学者が４名出ていらっしゃいます。そして、擬人化の問題をめぐりましてですね、擬人化は４歳ぐらいまでの子どもには理解できないということを心理学者がおっしゃってるんですね。

波多野：ほう。そう。

佐々木：はい。それでかえって、出版社の側の方とか、統制の側にまわった方が、それを批判するのですね。

波多野：そうですか。そういや、あんたので読んだような気がする。

佐々木：特に城戸先生が「動物にテニスをやらせんでも、自分と同じものがテニスをやればいいんだから」、擬人化なんてことは必要なんじゃないんじゃないか、ということをやっぱりおっしゃっているんですね、はい。

波多野：城戸さんが？

佐々木：で、それに対してやはり、市橋さんという出版協会の方が、下の名前がどうしても調べるんですけれども、分からないんですけれどもね。現実から空想が出るというばかりでなしに、文学から現実をみるという面もあって、それは一つのリアリティなんだということで逆にね、むしろ的確な批判をなさってるんですね。で、山下俊郎先生にしても、それからそこにありました城戸先生にしても、その辺がこう、どうだったのかなっていう印象が非常に強いんですねぇ。

波多野：あのねぇ、山下君みたいなね、一種のこう生活主義とでもいうようなね、そういうところから出発してきた児童研究ですね、及び児童研究の延長としてのその児童創作・児童文学というものはね、とかくそういうこう素朴な経験主義みたいなものに足をとられちゃって、上へ飛翔する力というものが少ないということは言えるでしょう。ええ、それは言えるんじゃないでしょうねぇ。しかしね城戸さんはね、そんなに生活ということにこだわってはいなかったように思いますがねぇ。そんなこと言ってる…実際に擬人化の問題をね、そういう風に言ってるんだとするとね、やっぱり城戸さんにも批判すべきところがあるということになると思いますがね、ええ。

佐々木：多分その頃の擬人化が、非常にイージーだということをよくおっしゃってるんですね。イージーであって、本当の意味の擬人化ではないという意味でおっしゃったのかもしれないんですけれども。やっぱりあの頃に擬人化ということの意味があまり認識されていなかったのか。例えば、絵本の絵なんかを見ましてもね、『黄金丸』なんかもそうなんですけれども、当時の日本人の画家がお描きになります擬人化っていうのは、本当にその動物の生々しいものが、そのまま着物を着たという感じの擬人化なんですね。ところがラチョフの『てぶくろ』とか、ああいう風なものになりますと、やっぱりもうひとつ新しい世界が完全につくられている。で、私もこの問題に関しては、もうちょっと後のところでも書いたんですけれども、もしかしたら、その頃に日本の絵本で擬人化をこう、うまく成功させるほどのものがなかったんじゃないだろうか、そのために心理学者が擬人化っていう風なものは、しなくてもいいっていう風なね、結論になってしまったのかなっていう気もするんですけれどもね。

波多野：僕もそう思います。全くその通りだと思いますね、ええ。つまり、日本の心理学界の空気全体がね、芸術に向いてなかった。芸術の方に顔を向けてなかったということね。それは、日本の心理学の置かれたね、その頃の宿命だったかも知れませんね、ええ。そいでまあ、波多野完治だけがそれから免れていたということはね、まあ、やっぱりフランスの心理学をやったということがひとつありますね。それから、アカデミズムからはねだしてたということね。アカデミズムの中には、なかなか入れてもらえなくて。

佐々木：そんなことございませんでしょ。

生活的にアカデミズムの中に暮らさしてくれないわけね

波多野：その、何、生活的にアカデミズムの中に暮らさしてくれないわけね。
佐々木：そうだったんですか。
波多野：だということは、結局その頃は就職なくて…。
佐々木：ああ、そういう意味で。ああ、なるほど。
波多野：そういうことがあったんですよ、ええ。で、僕はまあ、城戸さんには割合にね、世話になりましたけれども、あとの先生は全然面倒みてくれなかった。
佐々木：ああ、そうですか。
波多野：ええ。東大卒業してね、それでね、いろんな大学の講師をね、すこうしずつしながら、まあ、殆どジャーナリズムの世界で生活してた。暮らしはね。そういう状況でしたから。ですから、つまりフランスの心理学やったということと、それから僕の関心がね、その頃の心理学が一番大事だと思ってる問題から離れてた。その頃の心理学者が一番大事だと思った問題は知覚の問題ですね。その頃の心理学はゲシュタルトですね、大体ね。ゲシュタルトなんですけどね、ゲシュタルトのなかでも日本が世界に貢献したのは、知覚なんですね。そいでね、ゲシュタルトで、思考ですね、DENKENね。思考の問題っていうのもゲシュタルトの中では、非常に大事なんですけれども、そっちの方の貢献はあまりないんじゃないの？　あんまりないんでしょう。で、大山正さんとかああいう人は、皆知覚ですね。
佐々木：そうですね。
波多野：世界的な仕事した人々のはね。で、そういうような日本の進んでる、顔を向けている領域は、僕は全然興味がなくて、それで、現実とかね、そういうものに興味があったんです。自然、まあ学会もあんまり顔を出さないとかね、そういうことになるわけでしょう。ただ、その心理学者の中にもね、僕のような研究が非常に大事だということをね、考えてる人が何人かいましてね、それが城戸さんとか、それから依田新とかね、それから牛島義友、こういう人が時々いろんな講座とかね、そういうものを頼んでくれた、頼ましてくれたということですね、ええ。
佐々木：あの、霜田静志先生のお名前が。
波多野：これはね、僕は直接には、学説的な関係っていうのはかなり薄いんです。それはね、霜田静志っていう人はね、あれはもともとほら、心理学者ではない。心理学をやった人ではないのね。小学校の先生をして、そして、美術教育に関心を持って、で、イギリスへ渡ったのかな。あ、フランスだった、アメリカだかイギリスだかへ渡って、そうしてそこで、美術教育の勉強をして、日本へ帰ってきたんだ。で、そこへニールという人が現れたわけなんですね。で、そのニールの著書っていうものをね、ま、世界で一番早くっていったらいいんじゃないでしょうか、日本で、注目した。

そして、『問題の教師』というね、本を翻訳した。この翻訳がね、割合うまくいったんです。そいでね、ニール自身もね、その本が成功したもんですから、次々と本を出す。そしてニールはそのころもう既に自分の実験学校を持ってたかも知れませんが、自分の実験学校での実践を通じてね、『問題の教師』とか『問題の親』とかそういうものを次々と出版するようになる。で、霜田静志もそれに応じて、ずっと翻訳を出してね、で、ニールがフロイトに非常に影響されているということで、ニールを通じて精神分析の方へね、霜田静志はずっと入っていく。で、そこでつまり、精神分析的な芸術教育論というか、あるいは精神分析的な絵本論といいますかね、そういうものを霜田先生はやるようになる。そいですからね、学説的な関係っていうのは霜田先生と私との間には、あんまりないんです。ただ、個人的には非常によく知ってます。

それは、「児童」っていう雑誌がありますね。あの雑誌に霜田先生もよく書きましたし、それから僕も大変よく「児童」には書きましてね。そいからね、その刀江書院という本屋でね、一緒になったりね、一緒に飯食わしてもらったりね、なんかするってことは非常に多かったんで。もちろん霜田先生が日本のね、芸術教育の先覚者であるっていう、もうその頃から既に先覚者でしたからね、霜田先生はね。ですからそういう意味で尊敬もしてましたから、人格、人間的な交渉はかなりありましたけども、思想的な交渉っていいますかね、そういうものはあんまりないんです。ですから、つまりニールが戦後間もなくね、非常に高く評価されてたことがある。でね、その頃にね、僕はアメリカへ行って、それから1960年にイギリスへ行って、そこでね、ニールの学校見たりとかね、いうような話をいろいろしたんですけどね、イギリスの人達は殆ど知らない。ですからね、イギリスで知られるより前に日本でまず知られちゃった。
佐々木：ああ、そうですか。
波多野：ええ、面白い人ですね。
佐々木：面白いですね。
波多野：ですから、霜田静志って人も偉い人だった、ええ。
佐々木：そうですね。

波多野：で、そういう、だからまあ、霜田さんも私どもの仕事の、と平行してね、仕事をしてたという風にいうべきかも知れませんね。でね、一緒に仕事をしたことは、あんまりないんだ。
佐々木：あの、「指示要綱」の草案をおつくりになる時のメンバーで、ご一緒に入ってらっしゃいます。ですから、こう、何かあったのかなあ、と。
波多野：内務省の指示要綱に？　ああ、入ってましたか。
佐々木：はい。お入りになっております。
波多野：ですから、そういう意味では、つまり児童解放というね、そういう流れも全部入れて、内務省としては、あの本、指示要綱を考えたというべきなんでしょうね、ええ。ですから、そういう意味では、佐伯さんという人はね、非常に立派な仕事をした人ということができますね。
佐々木：もう一人、岡部弥太郎先生ですが内務省のものをうけましてね、文部省が図書推薦事業を１４年から始めますね。その中に心理学者としては、波多野先生と岡部先生が入ってらっしゃるんですね。
波多野：あ、そう？
佐々木：岡部先生もそういうことには興味がおありっていうか、ご研究なさってたんでしょうか。
波多野：岡部先生はね、これも話せば随分長いことになるんですけどね。（笑）あのね、大正８年に、東大の心理学科を卒業したんです、ね。そしてね、大正１０年頃か１２年頃にね、学科編成の問題っていうのがね、東大に発生するんです。それはね、大正８年っていうともう、第１次大戦が終わってて、そいで戦後非常に思想的に混乱してると、まあ政府の方では、そういう風に考えたわけね。つまり、組合運動みたいなものがその頃から始まりますから、これはなんとか思想善導しなきゃならないということを考えたわけです。思想善導というとこれは、教育でしょ。ですから、議会でね、教育関係の講座を大学のなかに増設してあげましょうと。そいで、教育関係の人を沢山つくってくれと、そういうことね、考えるわけですね。でね、非常に視野を狭く今考えてね、話して、ま、あとでそれ広げていったほうが分かりいいからそうするんですけれども、いいの？
佐々木：はい、結構です。
波多野：その時にね、５講座ね、じゃ増やしてあげましょう。教育関係の講座を５講座増やしてあげましょうということを議会で決めるんです。それをね、文部省を通って、東大へ下りてくるまでにね、教育学科の講座を５講座増やしてあげましょうという形に変わっちゃうんです。
佐々木：はあ、教育学科を。
波多野：でね、初めの５講座、教育5講座　増設というのはね、教育関係の講座を５講座を増やしてあげましょうという意味だったわけですね。ところがね、それが文部省を通って大学へ伝わってくる頃には、大学のなかの教育学科の講座を５講座増やしてあげましょうという形に変わっちゃうわけです。で、それを変えた張本人てっいうのがね、二人いましてね、一人は貴族院にいるね、林博太郎という伯爵、ね、もう一人は東大教授の吉田熊次この二人であった。でね、その林博太郎っていう伯爵はね、これは、東大教授でもあった。
佐々木：はあ。
波多野：で、研究会といったと思います。の貴族院のね、所属している団体が、研究会というんだったと思います。研究会の領袖でね、林先生っていえばもう、教育のことでは大変な実力者であった。まあ、大臣してもいいくらいのね、人だったわけですね。その人が貴族院議員をしてながら、同時に東大の教授もしてたわけです。そんな関係でね、その教育の５講座というのがね、そっくりその東大の教育学科にくっついちゃった。でね、大体その頃はね、大学は講座制ですけれども、ヨーロッパ系の大学の講座制とってましたから、大体一学科一講座だった。教育の方も確か一講座だったと思います。それへ５講座ワーッとくっついちゃったわけ。それでね、文学部がもう、大変むくれちゃったわけ。
佐々木：ああ、なるほど。
波多野：で、自分たち教育関係っていうんだからね、教育関係のことを教えるものとして講座をもらえばね、こういうものも増やしたい、例えば心理学でいえばね、児童心理学も増やしたい、それから、社会学でいえば、ま、教育社会学ってことば、この頃あったかどうだかわかんないけども、ま、そういうものも増やしたい。そいから、倫理学ね、これはもうぜひしなければ教育はできないんだから、倫理学科の方でも自分の方でも講座をもらいたいと、そういう風に考えるでしょう。
　で、そういうの全部それが教育へいっちゃったわけなんです。そいでもう、文学部が大むくれでね、大変な大もめにもめた。大学の中がもめたんですけれども、結局ね、教育の方では全部自分の方でもらうと。で、ただし自分の方でとてもね、処理しきれないのは他の学科の先生を引きとって、その講座を持ってもらうと、こういうことになっちゃったの。そいだもんですからね、東大の教育学科だけがね、教授が三人、助教授が何か五人ぐらい、そういうね、大賑わいになって他の学科はひとつもそれにあずからなかったわけですね。そういうことがあったわけなんです。そいでそん時にね、松本亦太郎っていう偉い先生

がいてその先生がね、心理学入れないのはね、実際おかしいんだから、自分の方の卒業生一人とってくれっつってね、で、教育の方に岡部弥太郎っていう先生を送り込んだわけ。岡部弥太郎先生は、心理学科の卒業生だったけれども、教育学科の先生として来られたわけ。でね、岡部先生は、大正８年に大学卒業したんですけれども、昭和２０年までね、２３年頃に確か定年でやめたんだと思う。６０でね、やめたんですけども、その前まで、直前までね、助教授。

佐々木：ああ。

波多野：そういう、ま、外様だから。

佐々木：ああ、なるほどそういう意味で。

波多野：助教授だった。ですけども、しかし、あの岡部先生のその心理学、教育心理学に対する貢献っていうのは非常に大きいものでありました。で、その岡部先生は、まあ文部省でね、委員になったときに、やっぱりその委員になってた…。

佐々木：そうですね。おやりになってた。

波多野：そいで、そういうようなことがありましたから、心理学的な教育問題はね、割合に関心がありましてね、まあ、絵本のことどうだったか分からないけども、子どもの本にはね非常に関心がありました。

佐々木：ああ、そうなんですか。じゃ、そういう風な論文ももしかしたらお書きになってるんでしょうか。私はちょっと、今まで目にしてなくて私の探し方が悪いのかもしれない…。

波多野：どうですか、そこ。ちょっと調べてみないと分かんないけども。そういう人です。そいで、岡部先生の話はそのぐらいに。でね、倉橋惣三っていう先生は、文部省の推薦委員時にはね、省内の委員として入ってました。

佐々木：あ、そのようですね。はいはい、民間でなくて、文部省内からお入りになった。

波多野：あの、女高師の先生するのと同時にね、視学官…督学官っていいました、あの頃ね。督学官してましたから。督学官として、委員のなかに入ってました。

佐々木：それで、先生、またちょっと話が戻りますけれども、先程その芸術的な面だとか、文学面の研究で心理学者が、なかなかアカデミズムの中に入れてもらえないっていいますか、入りにくいってことをおっしゃっていたんですけれども、それはそのまま現在もあるんですね。現在の心理学界のなかにも。

波多野：あるでしょうねぇ。

佐々木：はい。それは何故なのかって、私いつも考えるんですけれどもね。例えば先生はピアジェについての我国への様々な形でのご紹介、又は理論の発展という面では、もう波多野先生おいてないんですけれども、例えばピアジェ理論の特徴としまして、自己中心性とか、それから子どもが、その大人と違う独特の心理世界に生きてるっていう風なことというのは、やはり先生がこういう風な絵本とか文化の問題に、接近なさるということでのかなり大きなバックグラウンドじゃなかったかと思うんですね。ところがわが国において、ピアジェがそのままひき続き発展させられたのは、その部分は置いておいて、知覚であるとか、認知であるとかっていう点だけが何かこう、独走してるような気がするんですね。

　で、何故、そちらの面だけしか、戦後主として発展させられなかったんだろうかっていうことを考えるのです。やっぱり戦後の非常に知育中心主義的な教育というものが、ピアジェのそういう理論面を拡大して、日本でのばしてしまったということが、あるんじゃないかと思うんですけれども。そういうこと考えますと、芸術とか文化の面での側面から、児童心理学者が動き得ないっていいますか、中に入り得ないっていいますか、そういう体質っていうのは、何がいけなくて、どうしてなんだろうかっていうことを思うんですね。で、これがまた、国際的にもそんな感じがします。

波多野：そうそうそうそうそう。

佐々木：あの、絵本の心理学的研究なんかずっとたずねますと、イギリスにほとんどありません。で、アメリカにはありますけれど、どちらかといえば非常に細かい実験だとか教科書的なものが多くって、昭和初期に先生方がなさったような、大きな理論的な背景だとか、子どもの価値観の問題だとかっていう風なものを抜きにしたものが多い。心理学という学問領域にある限界っていいますか、それともやはり、心理学者がそれをきちっとできないのがいけないんだろうかっていうのは、いつも私の疑問に残ってるんですけれども。

波多野：その点はまあ、あんたの言う通りだねぇ。ええ、そうだ。

寺内：あのピアジェについて言うと、ピアジェがそういう、佐々木さんが言われているような形でしか伝えられていないっていうのは、結局ピアジェの学説っていうのは、いつもフランスから直輸入じゃなくて、みんなアメリカ経由で来るもんだから、アメリカでそのへんが切り捨てられて抜き取られてしまっているということはあるでしょう。ピアジェに限らず、フランスの心理学は大体そうですね。みんな直接入らないです。だから、アメリカナイズされてピアジェの紹介になってる。

佐々木：そうなってしまうんですねぇ。

寺内：全体をみていないっていう。で、芸術心理学っていうのは、確かに入りにくくて、戦後波多野先生方がされた『芸術心

理学講座』っていうのが成り立ちましたね。あれっきりですよね。まとまっているのはね。
波多野：そうだねぇ。その後はないねぇ。
寺内：やっぱりだめなんで、やっぱり実証主義の影響を強く受けてるんですね。
佐々木：そうなんですねぇ。
寺内：で、先生などは、戦後お茶大にいらしてから、例えばアルンハイムあたりを読んで、翻訳もでてますね。
佐々木：ありますね。私も読ませて頂いて。
寺内：そういったものをやってきているんですけど、これやっぱり広がらない。
佐々木：広がらないですねぇ。ですから、私どもも論文としてこういう風なものを出しても、その学会誌に掲載は恐らくされないんじゃないかという（笑）、思いが強くて、結局先生がおっしゃいましたように、むしろそのジャーナリズムっていいますか、そちらの方の需要が強いような形できてしまましました。

認知というものを通じないと心理学者として発言してもね、あんまり重んじられないようなところがあるでしょう

波多野：ふんふん…ふん。本当にそうですよ。認知というものを通じないと心理学者として発言してもね、あんまり重んじられないようなところがあるでしょう。
佐々木：はいはい。
波多野：ですから、芸術の問題でも、やっぱり結局認知とか認識とかね、そういう形で出さないとうまくいかないようですねぇ、ええ。
佐々木：なんかこう、ピアジェを日本に一番きちっと紹介なさり、又は広められました波多野先生としてね、なんかそういう風にピアジェの理論が行ってしまったことに関しては、何かお考えございますか。
波多野：うん、そらあ、あの、ピアジェ自身がね、50なん歳ぐらいから認識論を始めちゃったでしょう。
佐々木：そうですね、はい。
波多野：それでね、芸術あんまりよく分からない人ですしね、ピアジェって人はね。それですから、ま、自分じゃプルーストはとても面白かったため、みんな読んだって…ね、そういうこと言ってるんですけども、しかし、小説にはプルーストだけじゃない、まだいろいろある。（笑）そういうような、ね、あんまり、まぁ、あんまりっていうより殆ど読んでない。文学的なものはね、ええ。ピアジェ自身ね。だから、ピアジェ自身にそっちの方やってくれっていうのは無理でね。
　そうするとピアジェ的な考え方をとって、ピアジェの現実論を発展させるということが必要でしょう。それにはね、ピアジェの初期の考え方ね、ピアジェは子どもというものを社会学的なものとして捉えて、いろいろなことを説明したりね、研究したりしてくっていう方向が、初期にはとられたわけ。ところがね、だんだんピアジェがやってるうちにね、人間というものをね、生物学的なね、捉え方をして、そいで、いろんなことを説明したり、することに興味を持ち出しちゃったんですねぇ、ピアジェがね。そいで、私は初期のものから、発展さしていく方が、現実の問題をみるのにはいいんじゃないかと思ってますけれども、ええ。そんなようなことがありますね、ええ。
寺内：ただ、先生のあの絵本への関心っていうのはね、1930年代以降、それから戦後もそうだけども、今度は映像の方に移るんですよ。
佐々木：そうですね。映画を随分なさっておりますね。
寺内：児童映画とかね、それから放送ね。で、ラジオとかテレビとか当然、ずっと移っていくんですね。で、それは面白くて、城戸さん乾孝さんみんな同じなんですね。みんな同じところに移るんですね。そういう形で、ま、それは結局、社会的な状況がそういうプリンティングメディアよりも、そういった新しいメディアというものが生まれてきて、それに対する児童への関わりっていったものが問題になってくるから、それはそういった要請に応えて行くことになったんですね。
佐々木：あと、先生この論文にも書いたんですれども、絵本のですね、これ波多野勤子先生とも関わりがあるんですけれどもね、「民俗童話と児童心性」だとか、あと「絵本の選び方・与え方」なんていうのも、やはりこの頃沢山お書きになっているんですけれども、その中で、いわゆる残酷さの問題をめぐりましてですね、やっぱり子どもに継母の話であるとか、それから狼に赤ずきんちゃんが食われるような話っていうのは残酷で、そこまでやる必要があるのかっていう風なことをおっしゃってる部分があるんですね。それから勤子先生はグリムのものなど残酷さっていうものを取りのぞくための、一連のなんていいますか、結末を変えるような作業をなさっておりますけれども。そのことについてまた戦後いろいろ、問題が起っているんですが、この辺りの問題今、どういう風にお考えでしょうか。

波多野：僕は、今までと考えは変わらないです。変わらないですけどね。今そのようなものをね、見せてもちっともかまわないじゃないかっていうのが主流になってて、優勢ですね。
佐々木：そうですね、はい。特に、最近またそういう波が強いです。
波多野：そうですか。で、それは認めるんです。しょうがない。そいで、僕はやっぱり、平和ということにもう少し日本人がね、一生懸命考えるようになればね、このヴァイオレンスの問題っていうのは、私の考え方に有利なようになっていくんじゃないかと思うんですけども、しかし世の中が日に日に、私の反対の方へいっちゃってるんだからしようがない、ええ。
佐々木：ただまあ、その残酷さをそのまま与えるっていうことを主張するグループの論理ですね、まあ、グリムのなかの様々な話にもあるんですけども、一応それをお話として聞くことによって、子どもたちのなかに現実対処へのあるひとつの抽象的な能力が形成されていくんだというひとつの論理があるわけですね、ええ。
波多野：ははあ、なるほど。
佐々木：ですから、残酷であっても最後が一応ハツピーエンドとして、結末があるわけですね、グリムのものなんかは。
波多野：ハッピーエンドになってないのもあるでしょう。
佐々木：ええ、ペローあたりのものは、ハッピーエンドじゃないものも多いんですが。あのグリムのものは一応ハッピーエンドのもは、意外に多いんですけれどもね。ただその途中のプロセスが非常にこう、残酷なものが多いんですけれどもね、はい。

僕はあの、その口承文芸っていうものはね、口で伝える文芸っていうものは絶えず改作されていくもんだから、改作っていうことは決して悪いことじゃないんだ、という考え方です

波多野：うーん。僕はあの、その口承文芸っていうものはね、口で伝える文芸っていうものは絶えず改作されていくもんだから、改作っていうことは決して悪いことじゃないんだ、という考え方です。そいで、テキストを神様みたいに守るっていうのはね、あれはテキストが固定してきたからの話なんでね、ええ。で、その前はねテキストは非常に流動的なもんだったんです。そいですから、その時その時に応じてね、変わっていくのは当然だと。ですから、作者がね、その状況に応じて、またその子どもを受け入れる側のね、その子どもとかそれから話し手とかね、そういうもののあり方に応じてね、変わってくのは当然じゃないかという風に考えてます。
　で、そのテキスト通りね、読まなきゃあ朗読じゃないとかね、ああいうような考え方は僕はとらない、ええ。今でも、それはどんどん変わって変わって…。
佐々木：変わっていってもいいっていうことですね。
波多野：ええ、ええ。今の残酷なものを与えてもよいという考え方は昭和15年（1940年）以降から出はじめたもので、暴力的なものを読めばそれは暴力的傾向を空想の中で中和するという精神分析の方からきたものだと思いますよ。私の幼児文化に対する心理学者としての研究は主として昭和10年頃から第二次大戦のはじまる前頃あたりで、当時の理論は暴力的なものは子どもに与えない方がよいという風潮であったと思いますよ。当時はテレビがないから映画の研究で、「子どもは本質的には現実と非現実の混同をやる傾向があるから映画から影響を受けるものだ」いうことを書いてますよ。
　私は心理学的には未解決な問題でも心理学者として解決せざるをえない場面によく追いこまれましてね。世の中が残酷なんだからそういうものを子どもに与えて当然という人もいるが、私は、未解決な問題はペンディングにしておいて解決するような時期がくるまで待つという方がいいと思いますね。
佐々木：あと。これは心理学者の問題になるかとも思うんですけれども、やはり13年に「指示要綱」が出ましたあと、絵本の座談会が何回かございますね。で、ああいう時に心理学者が絵本について発言するのは、非常に実験的な結果を使って、子どもはリアルな絵でなければ分からないとか、しっかりと縁取りしてある絵でなければ分からないとか、それから色はその原色でなければいけないとかっていう風なかたちの、ある種その実験結果をこうどんどん出しましたね。で、それに対する反発が、編集者とかそれからまた文部省の社会局の三輪和敏さんていう方からの発言にもあるんですけれどもね、大体その、絵本のような芸術的なものの価値、良い悪いをですね、実験的な手段で判断できるものかっていう批判が、この頃からもう既に出てるんですね。
波多野：ああ、そう。
佐々木：ええ。で、ある種これは、なんか今にもそのままあるような気がいたしましてね。
波多野：そうですねぇ。
佐々木：で、やはりその頃波多野先生が、絵の中には分かる/分からないっていう判断でなくて、分かる絵と味わう絵があるんだと。だからその分かる/分からないで、児童心理学者が切るような切り方、やっぱり先生自体も批判なさってるんですが、

やはり今の心理学者が絵本とか文学に接近していくときの実験手法っていうのが、分かる/分からないっていうあたりでね、切るものが圧倒的に多いような気がするんですが。
波多野：今でも？
佐々木：多いですね。
波多野：ああ、そうかもね。認知が中心だからね。
佐々木：そうなんです。認知が中心なんです、はい。
波多野：その、分からないから面白いとかね、分からないからかえって高く評価されるとかっていうようなもの今は、だんだん認められるようになってきたんじゃないですか。
佐々木：あの、それは心理学者以外の方は、おっしゃいますけどね。
波多野：ああ、そう。ホホホホ…。（笑）
佐々木：ただ、そういうときにあの、心理学が実験やったりなんかします時に、どうしても結末を出しますね、統計的な処理で。で、そうしますと子どもの持つ気分的な快さとか、美的な感動というものが、いわゆる今いわれている心理学の実験手法の科学性というところで捉えられないという、問題ございましてね、認知の理論でいきますと。
波多野：そうですね。それは捉えにくいですね、ええ。
佐々木：で、それをやはりこの頃に、既に指摘されていて、ですからあの、心理学者が非常に大きな役割を果たしながら、その一方で、心理学者に対する不信感っていうのが、そのまま今も続いているような気が、いたしますけど。
波多野：ええと、この問題は、心理学の問題になるのかな、それとも、どういうことになる…。
寺内：吉田章宏さんあたりが、そのへんやってるんじゃないですか。
波多野：吉田章宏ね。ああ、そうかもしんないね。
佐々木：そうしますとなんか心理学者っていうものが、狭いとこへ狭いとこへと追い込まれていってしまって非常に私は危機感みたいなもの、感じ続けているんですけれどもね。
波多野：そうね、そのつまり認知だけ、認知が中心になることは、必ずしも悪いことじゃないかもしれないけどね、認知だけで全部わかって、全部人間がわかってきたというようないき方っていうのが、現在の認知理論のあり方でしょ。
佐々木：そうですねぇ。
波多野：やっぱり、そこが問題なんでしょうねぇ。認知理論の人も、必ずしもそれがいいと思っているわけではないらしいんだけども、やってるとだんだんだんだんそうなっちゃう。
佐々木：そうなってしまうんですねぇ。
波多野：こういうことなんでしょうねぇ、ええ。
佐々木：で、結局それが今の学校教育の要求と受験という風なものとまた結びついて…。
波多野：そう、○×ね。
佐々木：で、それは結局、先生がこの昭和初期におっしゃっていたように、児童文化というものが、いつも学校教育の中に、こう押しこめられてしまってる問題と同じ問題が今も、あるような気が…。

まあだから発達心理学みたいなものになるとね、認知だけじゃダメじゃない

波多野：でこういう風になるとね、その心理学者もね、あの一種のこう、競馬みたいのものの中へ入っちゃってるわけでしょう。そうするとね、その、わしは、あんなものばかばかしくてやれないよということが、非常に言いにくくなるらしいんですね、ええ。やっぱり、競馬やってんだから、とにかくゴールまで、一応とにかく走っちゃわなきゃ話にならない、ということのようですね。自分の考えてたね、心理学始めたときに、考えてたこととだいぶ話が違っちゃってるじゃないかと、そいでね、まあだから発達心理学みたいなものになるとね、認知だけじゃダメじゃない。
佐々木：はい、そうですね。
波多野：ええ。で、そういう場合には、やっぱり直感みたいなものが非常に大事になってくるでしょう。
佐々木：特に美的なものが、そうですね。
寺内：ま、外側から見てて、あの認知のグループの、僕などは、欠点だと思うのは、心理学者だけじゃなくて、エンジニアがかなり入り込んじゃってきて、機械的ですね、どうしても。人間の捉え方が、人間機械論的になってきて、それが結局は、人工知能に…。
佐々木：そうですね。

寺内：もっとも感情などは、落ちちゃうわけですね。
波多野：はあ、感情落ちちゃうの。ハハハハハ…。（笑）はぁ、ふーん、うーん。結局落ちちゃうのか。
佐々木：あの竹田俊雄さんのお名前が何度か出てくるんですけれども。少国民文化研究所のメンバーであられました。愛育研究所の研究者だった、この方も、いくら調べてもよくわからないんですけれどもね。
波多野：そうですかあ。
佐々木：で、愛育研究所にお電話をさしあげて、星美智子さんがいらっしゃいましたから、たずねたんですけれどよく分かりません、と。どういう方だったのでしょう。
波多野：そうねぇ。私もよく知らない。戦後多分あの人は、立教へ移ったんだと思うんですよ。
佐々木：ああ、そうですか。
波多野：そこから先のことは、あんまりよく知らない。少文協の時には、僕の下へ入ってたんだから、割合によく、つかんでたと思いますよ、ええ。
佐々木：あの、絵本に限りますと、絵本そのものについての具体的な分析とか、研究っていうのはある面で一番深い方じゃなかったのかなあという気もするんですが。
波多野：そうですね。一番深いですね、ええ。本当によくやってると思いますよ、ええ。
佐々木：波多野先生もご存じありませんか。
波多野：僕もね、少文協で別れたきりなんですね、ええ。
佐々木：そうですか。

ぼくはほら、少文協ってのはね、途中でコレになったでしょ

波多野：ぼくはほら、少文協ってのはね、途中でコレになったでしょ。（首に手を添えるジェスチャー）
佐々木：はい。
波多野：それだもんですからね、ちょっと、あの、つまり送別会もやってくれないしね。何か、この、ちょっと直しておきたいと思うのはね、滑川君の座談会によるとね、佐伯さんは、波多野にやめろと言ったおぼえはないと…。
佐々木：ええ、ちょっと曖昧におっしゃっていますね。
波多野：そうそうそうそう。
佐々木：これですね、はい。（「教育」1989、12月号の滑川、富田および佐伯氏の座談会のページ）
波多野：あの、それね、なるほど、そう言われればそうなんです。でね、佐伯さんはね、僕にね、お休みくださいと言った、ね。
佐々木：しばらくお休みくださいっていう。
波多野：いや、しばらくっていうのはつけないで、お休みくださいと言ったの。それで、だからつまり休養してればいいということだったのかも知れないし、そのまま、休んじゃえ！…（笑）という意味だったのも知れない。とにかく、はっきり僕にね、詰め腹切らしたほうじゃないということは、僕は真実だと思います。
佐々木：そうですか。
波多野：だけどね、そのまま残ってればね、城戸幡太郎さんとね、それから留岡清男さんがね、牢屋へつれてかれちゃってるあとですからね、必ずつれてかれた、僕も。そいで、僕が少文協をよして、そいで一際の公職をひいて田舎引っ込んじゃったでしょう。そいで、僕は助かった。
佐々木：この少文協っていうのは、戦後例えば『ボクラ少国民』（山中恒著）の問題だとか、いろんな意味でこの戦争への翼賛体制の協力という風な意味からすごく批判が出ておりますね。で、この滑川さんのこれも、先生のものとこの佐伯さんの座談会を読ませて頂きますと、この佐伯さんが詩人であったということが、ものすごく大きな、こう鍵になってますね。一人のこの方の存在ってのがものすごく大きかったなっていう気がいたしますね。
波多野：そうですねぇ、ええ。つまり、その内務省でね、早稲田の仏文科出た人間がね、仕事ができるはずないんですよ。
佐々木：ああ、普通で。常識で。
波多野：普通だったらばね、一高、東大ね、で、高文通った人が、采配ふって何かすればね、それは世の中動くでしょう。ですけどもね、早稲田の仏文科出てね、高文も通ってない人間がね、しかも図書の検閲がかりでね、絵本読んでるだけというね、そういうところにいた人間がね、日本のつまり児童図書からね、絵本からそういうものを全部ひっくるめて統制するという権限をつかんじゃうわけ。そういうようなことをね、できるはずないんです。で、それをまあ、あれは、佐伯さんはね、コッパ

役人だと、自分はね。コッパ役人だけれども、しかし志はあるんだ。志っていうのは、日本の今の絵本ね、非常に俗悪で印刷も悪い、それから色も悪いそういう三流かもしれない、そういうものをこしらえてていいかっていうね、そういうところから浄化っていうものをはじめてね、まがりなりにもとにかくそこら辺は全部切ることに成功しちゃうわけよね。で、一流のものだけが出てくるような体制をこしらえるわけでしょう。それだけのことができるっていうのはね、実際ねそら、ま、詩人としての情熱もあったでしょう、それから日本に対する危機感ね、今後の日本に対する危機感もあったでしょう。なにかな、とにかくそういうようなものはね、もやもやっとみんなの心の中にあってね、そいで、そういう風になってきたんでしょう。

佐々木：かたちになってきたんですね。それが、先程先生もおっしゃったように、昭和15年ぐらいを境にして別の方向っていいますか時の流れにこう、行ってしまうわけなんですけれども、その辺りからやはり佐伯さん自身が組織のなかの人間として、動かざるをえなかった面ていうのがあったんでしょうか。

波多野：そうそうそうそう、ね。で、佐伯さんは内務省にいる間は、非常なコッパ役人でしたね。情報局で高等官になる。情報局で、情報局情報官になって、その第五部第三課ね、所属の情報官になって、子どもの本とかね、そういうものの統制をやるようになるわけですね。そうなれば、もう自分の力で動かせる部分ってのはほんの少しになっちゃう。内務省にいる間はそうじゃなかったわけ。内務省にいる間は上の人が何にもわからないですから、警保局というところでね、何にもわかんないですから、ま、良きに計らえっていうわけでしょう。で、佐伯さんっていう人は、自分の思い通りにしたわけ。自分の考えたとおりにやれたっていうわけですね。

佐々木：で、まあ、こういう子どもの文化を国家がある種の統制、いい意味でいえば指針、ていうものを出すことについての問題点ていうのは、歴史の中で今残されていると思うんです。やっぱりこれは、ま確かに現代も商業主義との問題とそれからもうひとつは、自由という名のもとの低俗なものまでも含めた許容といいますか、というのは現在もあるんですけれどもね。で、それに対して、やっぱり当時行なわれたような、その政府というものが指針をつくるのではなくて、やっぱり自由なかたちであるべきだったのではないかっていうひとつの反省ってのがね、私なんかはこう、汲み取れる部分があるんですが、その辺りはどうなんでしょうか。

波多野：それは、あんたのおっしゃるとおりだと思うね、僕は、ええ。僕はそう思う。そう思うけどもね、あの時点で業界に任せたらば、多分良くなったという積極的な答えは出てこないと思う。

佐々木：ああ、ありませんですか。

波多野：それは、難しい。

佐々木：難しいとこですね。

波多野：そこが難しいところね。

佐々木：ただ、現在のね、非常に低俗なものっていいますか、どうしてと思うものが、時間とお金に任せてっていいますか、TVなんかでもね、随分あるんですけれども、やっぱりそういう風なものをうまくコントロールしていくっていうのは、もう双方の人達が考え抜いてやる、民間レベルで、なんかそういう風な形でしかありえない。ただ、日本の子どもとTVの関係でいいますと、日本は非常に規制が緩やかだといわれてるんですね。で、むしろフランスだとかアメリカだとか、子ども向けの番組が当然、この時間までとかっていう規制がありますし、それから有名な人気のあるタレントはコマーシャルに使ってはいけないとかね。ある種の規制はむしろ、諸外国の方がきついんですよね。で、日本はある種自由ということでそのままにされてる部分もあるんで、その辺非常に難しいところっていうのがあるんですけれども。佐伯さんは、でも、あの当時つくった13年の指示要綱は、今読んでもいいという風におっしゃっておりますね。

波多野：ふん、そうらしいのね。ふーん。

佐々木：その辺、法的なもので統制を加えるということと、それからやっぱり芸術とか文化っていう問題は、ある種、あの逸脱するところがあっても、自由競争っていいますか、ま、永遠の課題なんだろうと思うんですけれどもね。その辺のことが、もし先生の…。

波多野：そういう風に考えちゃうと、もう、つまり、なかなかそこから先がなくなっちまうんだよね。僕はね、日本のあの情勢の当時にあってはね、あの方法以外に手はなかったんだと思います。そいでね、幸いっちゃ悪いが、幸か不幸か日本にはね、検閲というね、それはあの憲法に保障されてたかどうか分からないけども、そういうね権力機構があったわけ。で、これはね、存在してたんです。で、それを使うか使わないかっていう問題があった。で、現在はね、権力機構ないですよ。

　ですから、使い用がないやね、そら。しかしね、あの当時にあってはね、そういう権力機構ってものはあって、そいで、これでね本当に悪いものはね処分できたわけ。発禁っていうね、非常に厳しいショツク的なことはできたわけ。で、日本の子どもの本をね、なおすのにはね、ショツクしかないという判断をした場合にね、それを使わないのがいいか、それでもそれを使った方がいいかっていう問題に僕はなると思います。で、僕はね、丁度ねその、ある事件をさばくのにね、弁護士がね、どう

いう風に動くかという問題とも関連してくる問題だと思うんですよ。つまり、法律を使うという、これはまあ一種の技術の問題ですよね。それでね、ここに検閲という法律があって権力機構があってね、でそれを使えばね、そういうショツク療法ができるわけ。で、僕はそんときにはね、そういう権力機構を使ったほうがいいんじゃないかと、今は考えるようになりました。これは、85歳になってね、新しく考えた説なんですけども。僕は今までね、ずっと自分のやったことは、悪かったと思ってました。50年間ね。ずっと悪かったと思っていました。

佐々木：あの、どういうところがですか。

つまり昭和13年の頃からね、自分は統制という手段を使って絵本の浄化をやったわけね。あれは、やっぱり自己批判すべきものである、という風に考えたわけ。ですから、ずっと自己批判を続けてたわけ。ところがね、どうも85になってね、そろそろ来年あたり…さよならっていうね、そういう時になって考えてみるとね、やっぱりね、あそこでねああいう権力機構があったらね、やっぱり使うべきだったんだと、確かに使って良かったんだという風に僕は、考えるようになった、ねぇ

波多野：つまり昭和13年の頃からね、自分は統制という手段を使って絵本の浄化をやったわけね。あれは、やっぱり自己批判すべきものである、という風に考えたわけ。ですから、ずっと自己批判を続けてたわけ。ところがね、どうも85になってね、そろそろ来年あたり…さよならっていうね、そういう時になって考えてみるとね、やっぱりね、あそこでねああいう権力機構があったらね、やっぱり使うべきだったんだと、確かに使って良かったんだという風に僕は、考えるようになった、ねぇ。

佐々木：その変わられたきっかけっていうのは。

波多野：別にあんまりないですけどね、それはあの佐伯君の書いたもの読んだりね、それから滑川君と話ししてね、あんたの言うことも一理あるなあという風に考えたりなんかして、そう思ったんですけどねぇ。そいで、文部省でやったことも、別に悪いことというか、あれはまあ推薦したということで、あれも悪いっていうことになるんですか？

佐々木：あの、悪いというよりも、やっぱり推薦という形の統制といいますか、そういう捉え方もございますね。

波多野：そうね。うん。

佐々木：ええ、推薦するってことはそれ以外のものを推薦しないという、ことになりますからね、はい。そういう問題は、指摘されてることはされてます。

波多野：なるほどね。そいで、あれを民間でやればなお良かったんだろうけども、文部省推薦という形でやったというね、そういうことですね。で、僕は、非常に世のなかの人がね、歓迎してくれたし、どうもやっぱり悪かったとは思いませんねぇ、ええ。

佐々木：ただその後半、だんだん先生のご意思が通らなくなる時代ってのがね、出てまいりますね。

波多野：そうそうそうそう。だから権力機構の持ってる恣意性っていいますか、わがまま勝手性ね。その性格っていうものが、あとになるほど出てくるわけでしょ、ええ。そいで、初期においては、あれは僕なんかが発揮してた、つまり大衆とともに歩くというね、そういう姿勢からの推薦ていうものが崩れてね、国家の利益のために推薦するっていうかたちになっちゃうわけですね。それは悪いんでね、で、それを監視する機構ですね、それがまあ民衆の側に非常にしっかりしてれば、僕はかまわなかったんじゃないかと。

それはもちろん、あの当時にあってはね、そういう監視する機構っていうものは、できませんでしたよ、ええ。できませんでしたけども、まあ私自身としては、一般の人とともに歩くというね、そういう考え方の人間がやればね、いいものを推薦して、で、悪いものを推薦しないと、そういう形で日本の児童文化にね、ある程度まで大きな影響を与えることができると、いう風に考えたんですね、ええ。で、その考え方自身はね、僕は、その文部省の統制の場合も、それから内務省のその否定的なね、ショツクの場合も間違ってなかったと。それはそういう権力機構っていうものはあったならね、ええ。で、いかなる場合にもね、自由っていうものを守るべきであるっていう考え方は、あの当時のひどい絵本をね、実際に見てた人間にはね、出てこないんじゃないかと思うんですがねぇ。

佐々木：ああ、そうですか。

波多野：ええ。そりゃ、あの上野のね、あの今でも上野のアメヤ横丁の後ろにはね、豆本なんかが山積みになってね、置いてありますよ。しかしね、それだって昔のもう、その50年前のね、絵本からみれば大変な違いなんでね、ええ、でそれはやっぱりね、そういうショツク療法っていうものがね、効いてたんだと思うんですねぇ、ええ。

佐々木：ただ、先生がおっしゃってるように、とにかく悪いものは排除すると、で、悪いものを排除することだけが最初の役

割であって、で悪いものがなくなった後に、自ずからまたいいものが出てくるであろうという予想のもとにやったんだけれども、そんなにすぐにはいいものは出てこなかったということをおっしゃってまして。で、それにもかかわらずその、文部省がね、すごく急がせるっていいますか、出てこないじゃないか、だけどそういうものってものはそんなにすぐに出てくるものではないんだ、みたいな発言をなさっていたのが、印象的だったんですけれどもね。

波多野：僕は、かなりいいものでてきたと思いますがね。

佐々木：ああ、そうですか。

波多野：ええ。今まで、殆ど出てこなかったようなね、ものが浮かび上がってきたと思いますよ、ええ。

佐々木：ただ、絵本のその9回ばかりの座談会がございますね。あの中で、確かその文部省側の方だと思うんですが、統制したけれども、その後なんか毒にも薬にもならないものが、残った。

波多野：アハハハハ。

佐々木：（笑）という言い方をなさってたのが、面白かったんですけれどもね、ええ。

波多野：まあ、そういうこと、ありますね。

佐々木：ありましたですか。

波多野：ええ、それはありますね、ええ。だから、そこがまあ、自己批判すべき、僕なんかはね、50年間自己批判し続けてきた理由ですね、ええ。まあ、死ぬ間際になって、突然その啖呵きって、そいで、死んでったということになるかもしれない。

佐々木：いえいえ。（笑）

波多野：そうなんですよ、ええ。

佐々木：そういう時代をくぐり抜けられていらして、現在の児童文化ですね、やっぱりひどいものもあるんですけれども、それはどうなんでしょうか。

波多野：そうですね。僕はね、この20年間ね、講談社の絵本賞っていうものの委員を担当してましてね、20年間ずっと日本の絵本を見て、そいでね、今年よしたの。

佐々木：あ、そうですか。

波多野：ええ、今年よしました。

佐々木：え、どうしてでいらっしゃいますか。

波多野：85になったんです。勘弁してもらって。そいですからね、そういう立場から見てね、初めの5年ぐらいはね、毎年毎年ね、絵本が良くなりました。それから、70年ぐらいから後はね、90年ぐらいまでですか、
75年から90年ぐらいまではね、今度はもう本当にいいのを選ぶのに閉口するぐらいね、ずっといいものがあった、と思います。でね、やっぱりこの2、3年停滞してるという感じですね、ええ。

佐々木：そうしますと、良い子どもの絵本ないし文化財が出るためには、やっぱりどうなんでしょうか。これだけものが豊かになりまして、かといって今、文部省自体が統制とか指導を加えるような実体っていうのは、今ないわけ…。

波多野：そういうことはないですねぇ、ええ。

佐々木：ですね、ええ。そうしますと、自由である中で、やはり優れた作品が出てこない、一体どういう風にお考えに…。

僕はね、やはり養成機関の問題だと思う

波多野：僕はね、やはり養成機関の問題だと思う。

佐々木：ああ、そうですか。

波多野：あのね、師範、教員養成大学のなかにね児童文化の講座のあるところは、そんなに沢山ないでしょう。そりゃ、講義はありますけどね、講座はないですね。どうしてもやっぱりね、作家の養成っていうことをね、積極的にやらなければいいものはできないと、そう思います。

佐々木：ああ、なるほどね。はい。

波多野：実は、少国民文化協会の研究所っていうのは、それをやりたかったわけなんです。

佐々木：ああ、そうですか。

波多野：ま、世の中の情勢がね、そんな情勢じゃありませんでしたから、もう。だからそんなこと、言い出すこともできなかったんですけどね、本当にいい、作家志望のね、絵描きなりね、それから童話作家なりっていうものを選んでね、それを兵役免除にして、そいでみんなに勉強してもらって、そのかわりに、そのいい絵本をかくというね、そういうような方法とればね、研究所で。僕はね、必ずいいものができたと思うんです。

佐々木：ああ、なるほどね…。そうすると、やっぱり現代、そういう子どものためにそういう風なかたちでのお金も使われてませんし、それから教員養成所でもそんな風なね、それこそ認知の問題ばっかりでね。
波多野：そら、かいた人みんながね、全部大作家になるとは限りませんよ。
佐々木：それは、そうですね。
波多野：だけどもその中からね、何人かね、天才的な人は出るに決まってるんだしね。そういう形でね、やっぱり養成課程っていうものをこしらえて、で、本格的に養成することをしなければ、やっぱり養成されないと思う。放っておいてね、いいもの出ろ、いいもの出ろっていったってね、そら無理ですわよ。どうしたって、あの、資本主義っていうものはね、利益を中心にするでしょ。そいですからね、今まで儲かったもののなかで、いいものを再生産することはね、それは割合によくできるんですよ。ですけどもね、その新しい冒険に乗りだすっていうことはね、なかなかしないですね。で、僕はまあ、今度は資本主義が勝ったっていうことになってるらしいけどもね。そらまあ、そうかもしんないけどもね、必ずマンネリ化すると思いますよ。資本主義自体もね。社会主義との競争ってものが今まであったからね、かなりいいとこまでいったんじゃないかと思うし、それから、民主主義ってものがそれにくっついてね、で、みんなでワアワア言った、ということがね、随分影響してるんだと。世のなかうるさいから、まあこのへんにしとこうかっていういわゆる資本主義の自己批判っていうか自己統制っていうかね、そういうものが効いてるんだと思うんですよ、ええ。
佐々木：ああ、なるほどね。
波多野：そういうものがある程度まであっても、資本主義の悪いところはなくなっていませんよ。まだ随分悪いことしてんですからね、その、人の見えないところで。だからね、この間加藤周一がね、マルタ会談の後ね、世の中の情勢について言ってたけどね、資本主義にも随分悪いとこあるじゃないか。それはあの、結局ね、今度は社会主義の方がね、少なくとも現実形態においては、非常に悪いところがあったんでね、あれはまあ、ひっくり返るっていうことになったけどね。資本主義の方はね、なしくずしにひっくりかえってるわけでしょう。
佐々木：はあ、はあ、そういう意味ではね。
波多野：そいですからね、これからだってね、やっぱり批判の自由ってものはね、価値はなくならないというようなこと、加藤周一は言ってた。僕もそう思いますよ。
佐々木：あと、あの13年の「指示要綱」の後少国民文化研究所の設立の機に、一番言われましたのが、「赤い鳥」の頃の大正期の童心主義ですね。自由主義って言いますかそれとその商業主義、そういうもの二つが一番こう、批判点として出てくるんですね。でも、あの先生が13年の「生活学校」の座談会のなかで、江戸時代の子どもが本当に豊かに遊んでいたこと、それがある面では「赤い鳥」に童心主義ではあったかもしれないけれども、引き継がれていたっていうことで、ある部分の評価は、なさってるんですね。ただその、「赤い鳥」については今読んでみると、その当時はそれなりに面白いと思ったけれども、なんかおじいさんの縁台話のようで実につまらんと、いう風なことをおっしゃってるんですけれど、あの中からもし、私達が引き継ぐべきものがあるとすると、それは一体なんなんだろうかっていう。

とにかく全人格を高めてくとかね、全人格を揺り動かすとかっていうようなものは、「赤い鳥」にはなかったように思いますねぇ

波多野：そうねぇ。まあ、一種の文学性とでもいったらいいでしょうかねぇ。そういうようなもんだろうと思いますけども、ええ。文学性みたいなものは、かなりね、うまくひき継げたんだと思うんですけれども、宗教性、まあ、あのこれは西欧の文学のなかに表れてるキリスト教を通じてのね、宗教性ね、そういうものは「赤い鳥」の中にはないんですよね。それは僕はね、やっぱり「赤い鳥」の限界で、そして、やっぱり「赤い鳥」があの辺までしかいかれなかった限界でもあるし、それをあの当時、宗教性で乗り越えようとすれば、キリスト教になるか、あるいはカトリックになるか、あるいは仏教になるかね、何か分からないけども、とにかくそういうものに、実際はなってしまうでしょう。で、それが僕に満足できるものかどうかは分からないですよね、ええ。ですけどもとにかく全人格を高めてくとかね、全人格を揺り動かすとかっていうようなものは、「赤い鳥」にはなかったように思いますねぇ。
佐々木：あの、今先生、宗教性っていうことをおっしゃったんですけれども、「赤い鳥」に対する批判というのは、子どもの生活、子ども自体の生活者としての感性みたいなものですか、それから遊離しているという言い方が意外にね、批判としてあるんですが。先生の宗教性とおっしゃったのが非常に新鮮っていいますか、もう少し、あの宗教性っていうことの意味についてお話くださいますか。

波多野：そうですね。これは僕の世界観とも関連してくる問題ですけどね、既成宗教が僕は大変いいものだという風に思っているわけではないんですが、科学の持ってる認識能力というものには、どうも限界があるんじゃないかということを、やっぱり、まあ来年あたり死ぬ人間として考えるんですね、どうしても、ええ。で、つまり、でね、科学、まあ相当僕も一生懸命勉強しましたかね、勉強した結果、得られたものと、こういうことまで知りたいという風に考えていて、まあ分からないとすれば、分からなくていいから、こういうような心境をつかみたいというような、そういう欲求との間には、かなり差があるのね。一生自分がやってきたことでね、で、それはこっちが小さいからだという風に片付けるわけにもいかないことがありましてね、ええ。もう少しなんとかなったんじゃないかという…ね。で、それをね、例えば、牛島義友君なんかは、あれはなんか旧約聖書と新約聖書とを、旧約聖書の場合はヘブライ語で写経したんじゃないか、殆どやったとかいう話し。旧約と新約とね。
佐々木：あ、そうですか。

僕はね、84ぐらいまで去年ぐらいまではね、あんまりそういうことは考えない。むしろ、学問だけでね、そこまでいけると実は思ってた

波多野：ええ確か、そうだと思う。日本語じゃなかったと思いますがね、ええ。そういうことでね、あの人は自分の晩年を安らかに送っているんですね。で、僕はね、84ぐらいまで去年ぐらいまではね、あんまりそういうことは考えない。むしろ、学問だけでね、そこまでいけると実は思ってた。ところが、去年ぐらいからちょっと身体こわしたりなんかした。すると、急にね、そこまでいかなくちゃならない必要が出てきてね、（笑）そうするとやっぱり牛島君みたいに15年も20年もかけて、聖書を写すという、ああいうやり方がいいのかなと。しかし、僕にはそんなものかけてやる宗教も教典も持ってないもんですからね、それで今になって、どうしようかと思ってるんですよ。急いで考えてる。（笑）こういうのはやっぱり、急ぐとなかなかうまい考えって出てこない。しかし自分の考え方としてね、やっぱり若い頃から少しずつそういう宗教性っていいますかね、なにかつまり自分を乗り越えたところですね、これは社会かもしれないし、あるいは社会よりももっと高いものかもしれないですね。そこんところは自分、私にもよく分からないんですけれども、そういうものを少しずつ教えていくっていう必要がね、あるんじゃないかと。ええ、科学だけじゃなくてね。
佐々木：なるほどね。
波多野：どうもそういうことですね、ええ。
佐々木：そういうことで考えますと、今年の4月から幼稚園の教育指導要領が変わるんです。で、その中で「自然」と「社会」がなくなりましてね、「環境」というのが新しく保育内容に出てきたんですね。身近な事象や動植物に対する感動や畏敬の念を抱くっていいますか、そういうものが入ってきたんですね。それがまたもめまして、天皇制の問題がまたひっかかってきたりして。私なんかはやっぱり、キリスト教の人がおっしゃるように、神を乗り越えられないというひとつの謙虚さっていいますか、そういう部分ではすごく納得できるものがあるんです。今先生がこうおっしゃったのはやっぱり教育要領のなかにも出てきてる部分があるんです。そういうものに早くから気づかせることという。それがまた、賛否両論になっております、はい。
波多野：そうですか。
佐々木：やっぱり地球とか自然破壊の問題が、大きいんではないかっていう風に私は、思うんですけれどもね。
波多野：そりゃ大きいですねぇ。人間だけだと、地球つぶしちゃうかも知れませんね。
佐々木：そうですね、はい。あと先生、最後ひとつなんですが、先生のお訳しになりましたものがございますね。で、その中で、このベテルハイムがピアジェを批判してる部分が出てきてるんです。ピアジェの考え方を「大人が大人の視点で、子どもを理解するには、役に立つ」と。だが、「こうして子どもの心のメカニズムを大人の見方で判断することによって、大人と子どもの間のギャップは、広がるばかりだ。同じ現象をあまりにも違った視点でみているので、全く別のものがみえてしまうんだ」っていう言い方をしておりますね。この辺り、先程ピアジェが現実の問題っていうものにあまり関与しなかったということと、重なるんでしょうか。
波多野：そうね。そういう関連ありますね。本当にそうですね。
佐々木：しかし、こういう子どもの大人にはない心性のようなものを発見したのもピアジェ自体なんですね。
波多野：そうそうそうそうそう。
佐々木：そうするとそれをその合理的な形で、収束させようとする方向へばっかりもっていった後の心理学者の責任になるんでしょうか。
波多野：そうね。そういうこともいえるでしょうね、ええ。そのピアジェ自身もそういうほうへもってったんですよ。
佐々木：あ、そうですか。

波多野：ええ。そいでね、つまり初期ピアジェと、その後年のね、ピアジェとの間には、だいぶ差があって、で、初期ピアジェっていうのは、ピアジェ自身もあんなつもりではなく、晩年のピアジェのところへ到達するつもりでなくて、学問をやってたんじゃないかしらね。

佐々木：なるほどね。あの、『ピアジェ晩年に語る』なんかを読んでみますと、私は心理学者といってほしくない、論理学者といってほしいっていう風におっしゃってますね。

波多野：ええ、そうね、ええ、そうですね。

佐々木：そうすると、このベテルハイムの批判は、見当違いではない。

波多野：あ、僕は、全く正しいと思うね。

佐々木：あ、正しいと思われますか。

波多野：で、ベテルハイムっていうのは、まあ、フロイディアンだかユンギアンだか、まあ両方でもあるんでしょうけどもね。大変優れた人でね、面白い人です、ね。人柄の方からいっても、なんかそこで言われてることからいってもね、大体やっぱりその辺じゃないでしょうかねぇ。子どものつかみ方としてはね、ええ。

佐々木：ありがとうございます。一応私の方でお聞きしたいことはこれだけなんですけれども、もし何か先生の方で、こういうところに注意するようにとかっていう研究上のアドバイスとか、ございましたら。

波多野：そうですね。僕の考えてることはね、今のような、つまり一種の宗教性ですね。宗教性っていうか、あるいは人間超越性とでもいいますかね、そういうようなものを若い頃から、教育しておかなくちゃいけないというね、そういう立場からいくと、今の臨教審路線っていうのがいいのか、新しい中教審路線がいいのかね。生涯教育論の考え方ですね、僕の生涯教育論と、少し違うところがある。で、その僕が生涯教育論っていうことを言い出したときには、そこまではっきり自覚はなかったんだけれども、大体において、一般教育というかね、一般教養っていうか、あるいは人間教育っていうかね、そういうものでね、生涯教育を全部まとめてくと、いうような考え方が非常に強いんです。私の立場はね。

　ところがね、現在の臨教審路線っていうのはね、生涯教育をね、ま、職業教育とかね、技術教育とか、そいから、せいぜいでね、ま、世界情報教育、ね。世界情報をどういう風に処理するかというね、そういうようなものまででとどめてみて、それ以上のね、ところまでいこうとしない、いこうとさせないところがある。そういう意味で、生涯教育を矮小化してる、という点が、私には現在のところ非常に不満です。でね、この問題強調するとね、ああ、それは都合がいいって言うんでね、で、文部省にまた利用されちゃうかもしれない。

佐々木：（笑）

波多野：僕はもう、さんざん文部省に利用されたわけでしょう。この20年、生涯教育ですっかり利用されちゃった。そいで、その結果は全部違ったところへもっていかれちゃった、ねぇ。そいで、非常に損しちゃったから、今度は損しないようになんとかしたと思ってる。で、それにはね、そのつまり、生涯教育の矮小化っていうようなことをいいだせばね、これはまた都合がいいやっていうんでとられちゃうおそれがあるんでね、これは黙って死んでいく方がいいか。なかなかそこが難しい。ですけれども、あなただからまあ一応ね、試しに話してみた。（笑）

佐々木：（笑）やっぱり、理念の問題っていうのは、あの、先程もね、おっしゃいましたように利用しようと思えばどちらの方向へももって行けますからね。